



だより



R6.11.12 Vol.27

今どきの保護者…

こう書くとちょっとマイナスイメージが湧きませんか？言葉って不思議ですね。

さて雑誌に目を通しているとこんなことが書かれていました。「地域の中でさまざまな人と関わりながら子育てしていた時代から、経済成長や都市化等により地域が空洞化し、相談できる、助けてくれる人が少なくなっているのが今どきの保護者の状況である。」

あ！これだ！と思いました。真穴はそれが今もうまく機能しているんですね。子供たちは自分より小さい子や親世代の方たち、そして高齢者の方たちと触れ合う機会がたくさんあります。それがつながりを深め、地域の絆も深まっているんだろうなと感じました。この循環がいつまでも続いてほしいなと思っています。

またまた ChatGpt

この校長先生は「アンチデジタルや！」と思われるかもしれませんが、そんなことはありません。ただ闇雲に全員右へならえ！で使用することには疑問は感じています。とはいえ、「デジタルはよくわかりません」では、『長としてどうなの？』って思いますので、ぼちぼち勉強はしています。こんな本を読みました。

内容は割愛しますが、例えば、生成 AI に「あなたは校長です！」と条件付けをしてやると、校長としての立場で対話を始めます。やはり、こちらの使い方次第なんですね。

←この判断ができる時期が使い時だと私は考えています。楽しそうとするのではなく、生成 AI との対話によって、より良いものを探そうとする意志！これが生成 AI との付き合い方の肝の一つのような気がします。



四方山話真穴 ver. 其の二十七(消しゴムを使わないという学習)

書籍からの話になりますが、私もこれまで常々思っていたことなので、少し書いてみようかと思えます。認知科学者ガイ・クラクストン氏の言葉を紹介します。「消しゴムは悪魔の道具だ。消しゴムは『間違いは恥』の文化を作る。間違いは受け入れた方がいい。実社会では、間違いは起きるのだから。」真穴小の児童に限らず、これまで私が関わってきた児童の様子を思い返すと、学習において(特に算数でしょうか)、誤答をノートに書くと、すぐに消して正答を書きたがる児童が少なくありませんでした。「間違いはそのまがいいよ！」と言っても、それが残ることが嫌なのでしょう。とにかく消してしまう子供が多かったように思います。そしてこれは私が中学生だった頃の話ですが、とにかく綺麗なノートを作ることにエネルギーを割いている友達も少なくありませんでした。

「後で見直したときに復習できるものを！」という考えや指導があります。もちろんそれも一方法として否定しませんが、私はノートは**作業場**だと考えています。脳で処理しきれない内容をメモし、処理したり整理したりするところ。そんなイメージでしょうか？処理する過程でたまたま間違いは残っていた方が仮に後で見返した時も「ここ！間違いポイントだよな！」と自分自身への注意喚起になるはずです。

歴史を紐解けば、情報を残す、伝える、始まりは口伝でしょう。文字の発明により、書き残す、書き伝えるという手段が生まれました。5世紀頃だそうです。それから1500年余り、時代は令和です。もし教師の板書を残したいのであればタブレットでパチリで済むのではないのでしょうか。

「教室は間違いところ、間違いを認め合うことで成長し合うところですよ。」そして、ただの一秒たりともやり直しはできない時間が人生です。私の人生！間違いしか残っていません！（爆泣）世界は誰かの仕事でできている！なんてCMがありました。人生は間違いの連続でできている！そう考えると、誤答を消す時間なんて他のことに使う方がよっぽどいい気がします。